



移り行く高々体育



戦後派
といわれる
人々が、国民
の大半を占めよ

高々保健体育科主任 川嶋 尚武

オリンピックから底辺はスポーツ少年団などの下部組織の養成強化まで手が入り出している現状です。

うとしている時代になりました。働く事を最も美德とし遊ぶ事を罪悪視して来た戦前戦中の人々も、現代社会の生き方を理解し、自らを改造する努力をして来ました。誰もが、心身の健康増進も兼ねて、スポーツに親しむ事が板に付きつつある時代といつてよいかと思えます。

今年の三月に出された経済企画庁国民生活調査課編の我が国の「十年後の生活予測」によりますと、国民の消費生活の面では、「趣味・芸術を楽しむ支出」が三八・四％、「住居・空間の充実と美化を楽しむ支出」が三二・六％、「スポーツなどの能動的レジャーを楽しむ支出」が一八・一％で、この三つが群を抜いて多く、他はいずれも三％未満となっています。以上のような急速なスポーツの生活化、一方チャンピオンスポーツは上は

このような広範囲にわたる体育スポーツ社会の中で、昭和四十八年四月より母校体育スタッフの一員として微力ながら精進致しております。私が学びました戦中戦後の教育は、私たちの世代誰もが感じた共鳴共感と違和感が胸の中に残されて、現在どれが何が正しいのか、鬼軍曹になれずもがいたりしています。その中で体育や部活動は胸を打つ教育であった事は確かであります。今ペンをとつていきますと、その頃の体育の諸先生が懐かしくその息吹が強く感じられるのです。当時体育は体錬科と称し武道（剣・柔道）・体操・教練に分れ、それぞれ二時間を与えられていました。体操の中の陸上競技も戦技訓練化し、体力章検定（今のスポーツテスト）は短距離走・長距離走・跳躍・投てき（上級生は手榴弾、下級生は棍棒投）・運搬（俵をかつき走る）

の五種目でした。教練の銃剣術では、中学二年の時に伊豆田二郎教官は、出来るだけ敵に接近し「面」の中からつばをひっかけろ、灰を顔面にぶちまけろと指導されました。（これは本土決戦を想定していたのでしょうか。）雨天には、防毒マスクの作り方を伝授されました。体錬科の目標は、「身体を鍛練し精神を錬磨して闊達剛健なる心身を育成して献身奉公の実践力を増進するを以て要旨とす」だったのです。故富田俊一先生（二一回）の徒手体操はそれは厳しく、笛をぐるぐる回して私たちの鼻先につけるスパルタ式訓練法でした。戦後はスポーツ教材万能となり、バレーボール・バスケット、それにラグビーが採り入れられフロントパス（今のスローフォワード）・ルーズスクラム（今のラック）などの専門語を体得するのが楽しみでした。昭和二十一年頃、アスレティクス・フオア・オールの精神、更にはアマチュアリズムの徹底と民主的人間関係の高揚を目指して国民体育大会が行われるようになり、二十三年バスケット部とラグビー部が初めて福岡国体（これが第一回インターハイ）に出場、全国の強豪を相手に青春をぶつけあったものです。

昔話は切りがありませんが、今振り返り優れた指導者といえ、戦中の富田先生、戦後教育の中心となった清水貞保先生（三〇回）、それに体育科外では野球の市川清先生（二五回）、ラグビーの岡田由重先生（社会科政治経済）で、特に戦後清水先生を中心に築かれた業績は将来を見通していました。

一、校庭の拡張（昭和三十五年）を始め格技場、プール（二十五年）、北関東一の体育館（三十九年）、合宿所にも使われている翠巒会館（四十六年）を残してくれました。

二、戦後の混乱期に、国体や野球の北関東大会出場は、高々生の士気を鼓舞してくれました。

三、前高定期戦（二十四年）を始め、全校マラソン大会（二十五年）を復活させ、今も脈々と続いています。

これら恵まれた基盤の上に立ち社会の中堅人物の養成を意義付けられた伝統ある高々体育は、既にスタッフも戦後派が勢揃いしましたが、受験競争のしかかる現教育体制の中で、移り行く高々生気質に、教育としての体育、教育としての部活動が急務となっております。幸い戦後のOBたちが中心となり運動部OB会の連合体といえる翠巒体育会が誕生し、物心両面より後援をいただいています。現在体育会は、単独のOB会では出来ない諸問題と取り組んでおります。健全な発展と協力を祈念してやみません。

本校ではいよいよ十二月に校庭の改修も始まる段取りになりました。三年前から使いやすい、排水の良い校庭を考えるとましたが、各部の要求を満たすには相当の額が必要になってまいりました。会員諸兄の御支援をお願い致します。

一方、新校舎の工事も着々と進み、玄関正面の飾り戸棚には、先輩たちの足跡が優勝カップ・楯・トロフィーとなって往時を物語っております。

（運動部長 四九回・バスケット部）

グラウンドの改修について



学 校 長
中 野 敏 宗

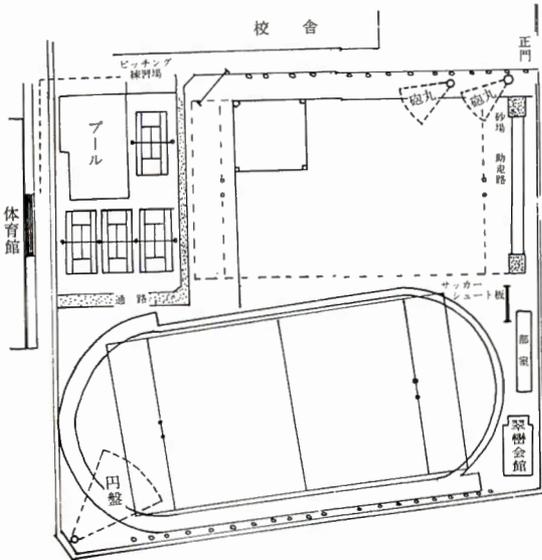
秋も深まり、昨日まで青々としていた銀杏並木が黄金色に色付く頃になりますと、落日も一際早くなり放課後の校庭はいち早く暮色に包まれます。しかしこの夕闇のたれこめた校庭に、なおも競技の練習に打ち込んでいる生徒たちの姿がほのかに見られます。この様に部活動に精魂を込めた教師や生徒の姿をながめる時、今日の高校生に様々な批判が与えられてはいても、わが高校教育は健在なり、感強くし頭の下がる思いがします。ここでは自らの厳しい体験によって、教室では得られない旺盛な気魄と不屈の根性、すなわち強靱な精神が培われます。グラウンドはその精神を陶冶する道場であり、学校としても重要な教育施設であります。この度全額県負担によって校舎は木造から鉄筋へ全面改築されますが、グラウンドの整備まで県の負担を期待することはできません。そこで同窓会・PTAに創立八〇周年の記念事業としてこれが実施を諮りましたところ、幸い関係各位の御理解を得て決定されました。元来、グラウンド改修のごときその結果の目に見え

ない事業は、寄附いただく人にとっても張合いがなく、記念事業としては不適当であるといわれていますが、快く承認されて学校としても深く感謝する次第であります。

その後、このグラウンド改修費の一部負担を県に陳情しましたところ本年度はその予算もつきましましたので、急ぎよ改修に着手することになり、既に各競技場の配置を定め設計を依頼しました。それは校庭の南側に四〇〇メートルをとり、その中は芝生を敷きつめサッカー・ラグビー場を容れることにしました。野球場は西北のプール近くにホームベースをとり、プールの周囲にバレーコート兼用のテニスコート三面をとる様に計画しました。この改修では排水に最も意を払い、全般に三、四〇cmの土盛りを行い、更に各競技場に適応して土の配合をし盛り土をいたします。

これらの精密設計も近日中に完成し、年内に施工、明春四月には完成させたいと思います。

このグラウンド改修を中心とした八〇周年記念事業の費用は約一億円を要しますが、卒業生各位の御協力により募金は順調に進み現在七、六〇〇万円の応募をいただきました。翠樹体育会の皆様からは従来も物心両面にわたって御支援をいただきましたが、募金目標額までもう一步でありますので、なお格別の御援助をお願いいたします。この先輩の大いなる心尽しによって生まれたグラウンドは、必ずや生徒の日々の練習の励ましとなり、その志気を鼓舞する源泉になると確信いたします。



戦績の数々 玄関正面の飾り戸棚 (S51・九)

特別寄稿



なぜ女性は男性より長命か

高々保健部長

田 島 秀 雄

翠巒体育会の会報「翠巒体育」第三号

が発刊される事を、心からお喜び申し上げます。さてその原稿を依頼されたが、スポーツに打ち込んだ事の少ない私にとって、何を書こうか全くの思案投げ首。九月十五日、今日はたまたま敬老の日であった。テレビや新聞は、老人問題についてのニュースや記事が目立った。その一つ。県内の九〇才以上の高齢者は一・四五三人、このうち九八才以上になる高齢者は三一人。高齢者の男女別内訳は男三五六人に對し女一・〇九七人で圧倒的な女性優位。最高齢者も男七人に對し女二四人。更に男女の平均寿命をみても、男七一才・女七六才と女性が長命であり、これは外国においても同じで、いまだかつて逆転した事がない。長生きの秘訣などについては色々の意見が書かれているが、女性が男性よりも長生きする理由についての記事は余り見た事がない。そこでこの問題について、私なりに考察してみた。紙面の都合もあるので、沢山ある理由の中でその一つである内分泌腺につ

いて触れてみよう。

ヒトの身体は、神経とホルモンの相関作用によって、血液の成分や諸器官の働きの恒常性が保たれ、健康が維持されている。ヒトのホルモンには多くの種類があるが、その中で中心的な働き（重要な他のホルモンのまとめ役）をしているのは脳下垂体から出るホルモンである。このホルモンは、例えば他のホルモンの分泌が多過ぎるとこれを抑制し、分泌が少なくないと活を入れて分泌を促進させ、ホルモン分泌の動的平衡を保っている。この重要なホルモンの出す脳下垂体の大きさを調べてみると、女〇・八二g・男〇・六gと女性優位である。すなわち、ホルモンのバランスは女性の方が良いという事になる。

次に、生命維持では最も重要な役割をしている副腎のホルモンについて考えてみる。副腎は皮質と髓質とに分れていて、皮質からは二〇種以上のホルモンが分泌され、これらのホルモンは身体全体の細胞・組織に働いてナトリウムイオンの排

出を抑制したり、水分の出入りの調節や糖・タンパク・脂肪の代謝、炎症の促進や抑制など、特定の標的器官がある訳ではないが、生体全域にわたって細胞・組織の生活そのものに不可欠のホルモンなのである。我々がストレス（傷害などに遭遇すると、その刺激が間脳から脳下垂体前葉に伝わり、副腎皮質刺激ホルモンが分泌される。このホルモンによって副腎皮質から鉱質コルチコイドが分泌され、組織の反応性を増す。その後、同じ皮質ホルモンである糖質コルチコイドの分泌が高まって炎症を静めて、これらの悪条件によく耐えるのである。すなわち身体的安全を守る重要な調節作用をしているのである。この副腎を見ると、雌の副腎は雄に比べて大きい。白ネズミなどでは倍の大きさを示している。この雄の白ネズミから睾丸をとると、小さかった副腎が大きくなるから、睾丸のホルモンが副腎を小さくさせていたといえる。反対に雌の白ネズミから卵巣をとると、副腎は小さくなるから、女性ホルモンが副

腎を大きくさせていたといえる。ヒトでも、女性ホルモンを注射すると副腎皮質ホルモンが増して来る。従って、女性ホルモンが副腎皮質ホルモンと協調して元氣付けている訳である。また妊娠した女性には、副腎皮質ホルモンが多量に充滿していて抵抗力を高めているのである。以上の事実から、脳下垂体ホルモン・副腎皮質ホルモン・女性ホルモンは、お互いに作用しながら動物を長命にするホルモンであり、いずれも男性より女性によく発達している。男性が不摂生をした以外で活動したりするためでない事は、他の動物でも雄が短命である事実が物語っている。男性が酒を飲み過ぎるため短命であるなどといった愚論もあるが、他の動物には適用しない。男性が男性ホルモンを分泌し過ぎると短命に終わってしまう。太った性慾的な男性が、案外コロリと倒れる事の多いのはこのためである。下等動物の世界においては、生殖が済めば雄は用がないが、雌は子を育てる仕事があるので雄より長命の必要があるのであろう。交尾の済んだカマキリの雌が雄を頭から食べてしまう共食い現象も、その一つの現れである。ただしこれは人間についてだけは例外で、男性は文化的・社会的に大いに活動するけれども、下等動物の性状の一部がなお人間にまで残存して男性を短命にする結果を生ずるのではないだろうか。

最後に、翠巒体育会のみすますの御発展をお祈りする。

(四一回・理科生物)

特別寄稿

運動部長の日記より



清水貞保

気の遠くなるような長い年月、私は高
中・高々に在職していました。そして私
の教員生活は平凡な日々でありました。
取り立てて挙げれば、それはスポーツを
軸にした動きが長い私の生活を支えたの
だと思えます。それなのに、卒業生の方
々は皆立派に成功しています。そんな事
を考えると、年をとった私はその責任を
問われるように感じてなりません。また

卒業生に、「先生、お元気ですね。ちょ
つとも変わりませんね」と挨拶されたりす
ると、その言葉が本当に素直に受け入れ
られて暖かい思いがするようにもなって
しまいました。肉体的にはとうに現役時
代の「ねばり」も薄らぎ、先頭を走り続
ける気力は昔になってしまいました。

老いた教師は、何かにつけて考える事
も面倒になり、口を開けば教え子たちと
いう言葉が飛び出してしまいます。しか
しこの方々は、社会のリーダーとして責
任ある仕事に活躍している人たちであり
ます。翠巒体育会に関係している方々も
もちろんその人たちです。私はもうこれ

らの人たちに何もして上げられないけれ
ども、私が在職していた日の高小・高々
の古い日記から活かすとしたら、それは
出来る。それは私の作り事ではないか
らだ。今回は翠巒体育会の方々の御苦
勞を思い浮かべながら、古い時代の遠征費
について参考に発表する事にします。

遠征と遠征費は、何時の時代でも本当
に大変なものです。取分け、昭和二十二
年頃から二十八年頃まではそれはそれ
は大変でした。世の中はどこへ行っても無
い物ばかり、その中でも食糧はありませ
ん。そんな時代にスポーツを通して強く
したので。空腹に打ち勝ちながらトレ
ーニングを積み、どの部も母校の名譽を
かけて頑張りました。優勝して代表にな
っても、遠征費の捻出にはまた別の苦勞
がありました。どんなことをしても、こ
の選手たちのために作り出してやらなけ
ればなりません。そんな時には決して卒
業生に頼る事になりました。それも何度
もお願いに上りましたので、先方にも大
変な迷惑を掛けてしまいました。

昭和二十九年、PTAの御高配をいた
だき、総会で「県外派遣費」の予算化が
決定されました。それからは遠征費につ
いて、必要費用の最低額を確保する事が
出来て、心配が大分薄らいでまいりまし
た。年度別一覧表を作ってみましたので、
御高覧下されば幸いです。

終に、翠巒体育会が、今後ますます母
校発展のために、そして現役たちの良き
人生の先達として協力されるよう祈って
やみません。また、現役の人たちには次
の三点を望みます。

- ①基礎の力を養って粘りの精神と最後の
詰に全力が出せるための鍛錬に励んで
欲しい。
- ②読々と頭を上げる新興勢力に潰される
事のないようにお互いに努力して欲し
い。
- ③伝統というものに何時もフレッシュな
魅力が感じられる高々であって欲しい。

(三〇回・群馬スイミングスクール
理事・事務局長)

株式会社 大同菓子

取締役社長

田島 良太郎 (二九回)

高崎市問屋町二二
電話〇二七三(六)七九五一

小川薬品株式会社

取締役社長

小川 健 一一(三〇回)

高崎市上並榎町三七八
電話〇二七三(六)二二二二

井上物産株式会社

取締役社長

井上 卯一郎 (三三回)

高崎市問屋町二一
電話〇二七三(六)二二四一

トヨタカラー高崎株式会社

取締役社長

小山 禧 一 (四二回)

高崎市昭和町四一
電話〇二七三(三)六二一一

高々運動部県外派遣費年度別一覧表

—昭和29～40年度—

《その1》

年	月	日	大 会	開 催 地	人 員	派遣費(円)	年	月	日	大 会	開 催 地	人 員	派遣費(円)
29年	5	14・15	北関東バスケット	宇都宮市	13	9,750	32年	5	17	北関東高校バスケット	熊谷市	12	10,080
	5	28・29	関東バスケット	東京都	13	9,360		5	26	関東高校剣道	日光市	7	6,440
	5	29・30	国体ラグビー北関東決勝	東京都	20	14,400		6	31	関東高校バスケット	東京都	12	17,980
	5	29・30	関東高校剣道	千葉県	7	6,710		7	13	関東高校陸上	水戸市	4	6,720
	8	6～8	関東高校水泳	茨城県	5	7,050		8		東日本高校庭球	浜松市	5	13,920
	12	10～12	全日本総合バスケット関東予選	東京都	12	14,300		8		全日本高校庭球	秋田市	8	38,260
	1	29・30	国体スキー県予選	大 穴	1	500		8		全日本高校陸上	富山市	1	5,995
30年	5	13・14	関東高校ラグビー	神奈川県	20	17,300	8	12・13	全日本高校バスケット	東京都	12	21,220	
	5	26	関東高校柔道	大 宮 市	7	5,608	8		関東高校水泳	大 宮 市	1	1,560	
	5	28・29	関東高校剣道	千葉県	7	7,140	10	23	関東高校庭球	甲 府 市	8	14,850	
	5		関東高校陸上	宇都宮市	4	5,384	33年	5	18	関東高校相撲	都 留 市	4	5,132
	7	29・30	全日本庭球	仙台市	2	4,064		5	19	関東高校ラグビー	習志野市	18	18,860
	8	9～10	関東高校水泳	鎌倉市	7	10,085		6	28・29	関東高校陸上	甲 府 市	7	14,280
	8		全日本高校陸上	酒田市	1	3,150		7	21・22	関東高校庭球	川 口 市	2	1,970
	8		全日本高校柔道	大 分 市	7	54,875		8	1～3	全日本高校庭球	伊 勢 市	8	37,320
	10	28	国体ラグビー	横須賀市	20	30,228		8	9・10	全国選抜相撲十和田	十和田市	4	10,500
	12		全国高校ラグビー関東予選	神奈川県	20	19,200		8		関東高校水泳	館 山 市	2	3,760
12	11	全国高校ラグビー関東決勝	東京都	20	7,000	9		22	国体ラグビー関東予選	東京都	17	10,300	
31年	5	19・20	関東高校ラグビー	水戸市	20	31,800		9	22	国体庭球関東予選	小田原市	2	1,920
	6	9	関東高校バスケット	川崎市	12	11,160		12	6・7	全日本高校ラグビー関東予選	東京都	16	17,330
	6	22・23	関東高校柔道	千葉市	7	7,570	34年	5	16	関東高校ラグビー	大 宮 市	20	19,900
	6	30 7 1	関東高校陸上	千葉市	7	10,500		5	24	関東高校相撲	水戸市	4	4,380
	7	22・23	東日本高校庭球	小田原市	4	4,600		6	5・6	関東高校バスケット	川 崎 市	13	13,320
	8	4・5	関東高校水泳	甲 府 市	6	10,020		6	19・20	関東高校体操	横 浜 市	1	2,010
	8	4・5	全日本高校陸上	高 知 市	1	5,420		6	27・28	関東高校陸上	大 宮 市	2	3,000
	8	7～9	全日本高校庭球	伊 勢 市	5	17,650		7	27・28	関東高校サッカー	甲 府 市	14	22,350
	8	25・26	全日本高校相撲	大 阪 市	4	19,270		8	5～8	全日本高校体操	山 形 市	1	5,070
	9	8・9	国体柔道関東予選	浦 和 市	3	960		8	7・8	関東高校水泳	宇都宮市	2	3,580
	9	15・16	国体庭球関東予選	東京都	2	2,058		10	4	国体ラグビー関東予選	東京都	20	26,200
	9	29・30	国体バスケット関東予選	大 宮 市	10	3,460		10	23	国体ラグビー・体操・バスケット	東京都	24	12,000
	10	26～31	国体庭球	明 石 市	2	4,000		12	7	全日本ラグビー関東予選	新 潟 市	21	36,160
	12	4	全日本高校ラグビー関東予選	新潟市	19	22,310		1	25	全国高校・国体スキー県予選	戸 倉・草津	1	1,985
	12	11	全日本高校ラグビー関東決勝	東京都	19	19,380		2	22	全日本高校スキー	小 樽 市	1	8,135
1	29	全日本高校スケート県予選	榛名リンク	2	960	35年(1)		5	14・15	関東高校ラグビー	武蔵野市	18	23,520
32年	5	12	関東高校ラグビー	甲 府 市	17			30,020	5	28	関東高校卓球	千 葉 市	2

高々運動部県外派遣費年度別一覽表 —昭和29~40年度—

《その2》

年	月	日	大 会	開 催 地	人 員	派遣費(円)	
35	6	13	関東高校剣道	横浜市	7	9,254	
	7	7	関東高校陸上	立川市	2	3,750	
	8	7	全国高校選抜相撲十和田	十和田市	4	8,100	
	9	16	全日本高校陸上	神戸市	1	5,000	
	9	18	国体ラグビー関東予選	東京都	18	17,000	
	10	1	関東高校相撲	甲府市	7	14,070	
	10	19	国体陸上	熊本市	1	500	
	(2)	11	27	全日本高校ラグビー北関東予選	東京都	18	24,300
	1	4~29	全国・国体スキー県予選 スキーリーダー講習会	戸草倉津	32	6,390	
	2	1~5	全国高校スキー	秋田県輪	2	13,360	
36	5	20・21	関東高校ラグビー	宇都宮市	17	19,830	
	5		関東高校剣道	千葉市	7	10,740	
	8	25	関東高校サッカー	藤沢市	15	22,810	
	8		全日本高校剣道	岐阜市	7	27,250	
	9	3	国体ラグビー関東予選	武蔵野市	16	24,830	
	1	4~7	関東高校スキー県予選	戸倉	1	4,720	
	2	6~12	全日本高校スキー	小千谷市	3	20,190	
37	5	27	関東高校剣道	水戸市	7	10,955	
	5	27	関東高校相撲	横浜市	7	13,610	
	7	23	関東高校庭球	小田原市	4	6,520	
	7	23	関東高校陸上	藤沢市	1	2,520	
	8	2・3	全日本高校庭球	下関市	4	26,480	
	8	2・3	全日本高校剣道	青森市	2	11,120	
	8	2・3	全日本高校相撲	大阪市	6	36,120	
	9	8・9	国体庭球関東予選	川崎市	2	1,960	
	9	8・9	国体剣道関東予選	浦和市	5	300	

年	月	日	大 会	開 催 地	人 員	派遣費(円)
37	12	7・8	全日本総合バスケット関東予選	横浜市	13	21,620
	12		全国高校スキー県予選	戸倉	2	5,958
	12		全日本高校スキー	青森県 大森	1	9,625
38	5	11・12	関東高校ラグビー	平塚市	20	35,900
	5	25・26	関東高校剣道	日光市	7	11,760
	6	1・2	関東高校相撲	館山市	6	19,120
	6	9	関東高校柔道	大宮市	7	11,350
	7	1	関東高校陸上	宇都宮市	2	4,760
	7	23	関東高校庭球	甲府市	4	6,480
	7	27・28	全日本高校相撲	大阪市	1	5,700
	8	3・5	全日本高校柔道	松山市	1	8,540
	8	4	全国高校選抜相撲十和田	十和田市	4	14,080
	8	5・6	全日本高校庭球	伊勢市	2	11,420
	9	8	国体相撲関東予選	笠間市	1	520
	1	4~7	全日本高校・国体・全 日本総合スキー県予選	戸天倉平 神奈川	3	8,485
	2	7・8	全日本高校スキー	福島県 猪苗代	2	13,630
	39	5	4・5	国体ラグビー北関東予選	水戸市	20
5		4・5	関東高校相撲	笠間市	7	22,400
5		16・17	関東高校剣道	東京都	7	13,160
6		5~8	国体柔道	加茂市	1	1,500
6		26~28	関東高校陸上	水戸市	4	13,560
7		25~28	全国高校相撲 全国相撲東西対抗	大伊勢市 伊勢市	7	49,935
7		25~29	関東高校サッカー	館林市	15	12,750
8		5~10	全日本高校陸上	大阪市	2	15,000
8		10~12	関東水泳	横浜市	1	3,070
9		19・20	関東高校ラグビー	水戸市	20	30,800
40	5	6	県高体連スキー新人	戸倉	1	690
	5	15・16	関東高校ラグビー	水戸市	18	49,750
	6	19・20	関東高校相撲	蕨市	7	25,640
	6	26・27	関東高校陸上	千葉市	5	17,300
	8	1~4	全日本高校柔道	熊本市	1	9,970
	8	4~6	関東高校水泳	甲府市	4	15,320
	7	31~ 8 3	全国高校陸上	大分市	1	9,820
	12	4	関東高校サッカー	館林市	15	6,000
	12	28~31	高体連スキー強化合宿	戸倉	3	1,240
	1	4~9	全日本高校・国体スキー県予選	大穴	5	2,940

ろばた焼 野 武 士
高 橋 三 郎 (四八回)
高崎 市 東 町 九 一
電話〇二七三(一)一五三三二一六

善如寺医院
善如寺 秀 (四六回)
高崎 市 倉 賀 野 町 五 三 九
電話〇二七三(四六)一三三八二

O B 会 の 活 動



応援部を見ていて

応援部

下田 茂夫

昭和二十四年夏の高校野球大会では、甲子園を目前にして水戸商業高校に敗れた。この年は早稲田大学応援部の福田正一先輩(四六回)が応援のリーダーをかって出て下さり、翌年私が三年の時に同氏の指導を受けて有志で応援部が正式に発足した。発足した時は、学生らしく学生服でやろうと意気込み、全校の熱意も盛り上がり、統制のとれた応援は県下唯一だった。既に三〇年前の思い出である。

最近まで色々な高校の応援部を見ていて感じるの、リーダーは大声だが何を言っているのか明確でない。また、上半身が前後に揺れて不安定で、更に肩に力が入り過ぎて指先の締りがなくなり力強さと節度に欠ける欠点が目につく。最近ではテレビでもスタンドを写す事も多いので、練習の時によく注意して欲しいものだ。また、OBや一般人の中には学生と一緒に応援したい人も多数いるのだから、学生席の範囲だけにとらわれないで、そんな人々も気楽に仲間入り出来るように雰囲気や部員の創意で作り出して欲しいものである。

卒業後、数回母校も甲子園一步前まで勝ち進んだが、その間に現役諸君が工夫

し、スタンドにはフクちゃんや王将の大駒が現れたり、羽織・袴という昔のスタイルになったり、今年はずいに女子のいない高々にバトントワラーが出現したと入院生活中の私に息子が報告した。

母校のスタンド風景も随分華やかに変化して来たものだが、甲子園のスタンドで現役諸君と「翠巒」を歌う夢はかなえられない。現役の諸君、その日に備えて頑張ってもらいたい。(五〇回)

トライ・ボックス ラグビー部

中原 射鹿止

「群馬惑々クラブ」。男四〇才を過ぎて惑い惑ったラグーメンたちが、トライの夢よもう一度とばかり、ここに集まりラグビーを大いに謳歌している。最低年令四〇才、長老は年は教えないことにした。プレーの若さでは決して負けぬと豪語している。試合後の数日は、全身の苦痛と倦怠感に悩む。しかし、二日酔とは違った何とも言えぬ満足感があり、仕事にも熱が入ろうと言うもの。関東一円に遠征し、返礼に招待しては熱戦を繰り広げ、ミーティングのビールの味を高めている。

我らOB会員もかなりの人たちが加盟しているが、皆現役当時とは少しも変らない。ゴールキックを得意としゲームを

有利に展開せしめる者、ハードタックルこそラグビーの最高の味だと相変らずの強気者、俺がトライをとばかり強引に突進し自爆する者、皆若い。今春、東京の「不惑クラブ」との対戦で、住谷克彦氏(四九回)が念願の初トライをあげた。以後、トライした者は一回につき金一〇〇〇円也の献金義務が与えられた。その献金箱が「トライ・ボックス」なるものである。広くラグビー発展のために寄与出来るならばと考えている。

「トライ」は得か損なのか。ゴール前で強気のみならず自爆する者は多いが、トライチャンスに他に譲つた者は見たことがない。女性のマネージャー(二名合せて四〇余才、念のため)からの試合通知が楽しく待たれる毎日である。(五五回)

体育教室でのスナック

(S五一・九)



(左から滝沢・菊地・丸山・小林馨先生)

株式会社 カタノ運動具店

代表取締役

片野 恒 (四九回)

高崎市 中紺屋町二二三
電話〇二七三(二二)二五五二

有限会社 土橋商店

専務取締役

土橋 正義 (四九回)

高崎市 問屋町一六〇
電話〇二七三(六二)〇八八

株式会社 中曽根商店

代表

中曽根 文三 (四九回)

群馬郡 榛名町下室田九六七
電話〇二七三(七四)〇〇四五

マキエ一貫堂薬局

薬剤師

牧 絵 孝 夫 (四九回)

高崎市 連雀町二一九
電話〇二七三(二二)三八四七

サッカー部

青春の絆 1



多難の創設期

国峯 善次郎

群馬のサッカー史は浅い。昭和の初め群馬師範学校(現群大・教育)・桐生高等工業学校(現群大・工)・藤岡中学校(現藤高)にチームがあつて、県大会や練習試合が行われていたと聞く。

戦後、昭和二十二年秋までに中等学校(現高校)五校——勢多農林学校・前橋商業学校・高崎中学校・沼田中学校・館林中学校——にサッカー部が設立され、二十三年十一月利根農林高校が参加、二十四年八月二十二日館林南小学校において群馬県サッカー協会が発会し、次いで二十五年五月七日桐生工業高校において高校体育連盟サッカー部が発足した。

高中サッカー部は昭和二十二年十月誕生した。初代主将故渋沢明(四九回)。当時の世相は知る人ぞ知るである。ともあれ何もない時代であつた。よくサッカーボールが作られたものと思つている。今なお鮮明に覚えているのは、第一日六

〇余名、二日目三〇余名、三日目二〇余名が四個のボールを長ズボン・裸足で蹴つたこと。試合のための手作りのユニホームのこと。ワイシャツに横一本幅一〇cmの赤い帯を入れ、短パンツは母の手縫い、ストッキングはそろつたものの地下足袋姿であつた。私は父に竹を割つてもらい、真綿で裏地を作り臍当を作つた。ユニホームについてこんな話がある。R Iに桶昌幸(現杉村・四九回)がいた。とにかく頑張り屋であつたが、「桶が箍をはめた」と言つて自他共に笑つたものである。指導は、仙台二中・東北学院出身の岩淵定義先生にしていた。岩淵先生は高陽中学校の数学を担当されていて、先生を囲む私の一年先輩のグループが中心となつて結成したものである。

岩淵先生は、中学一年からレギュラーとして明治神宮大会に連続出場、後年帰仙されても四七才まで宮城教員チームの一員として国体へ出場された名プレーヤーであり、高々サッカー部の礎を造るに当り正に人を得たのである。

地下足袋の時代は二年位続いた。何一つ食うものはなし、インフレで金もなしで、チャップリンの映画に空腹を紛らわすために履いていた靴をゆでて食べるのがあつたが、我々も古くなつたボールでも……の空腹に打ち勝つて練習に明け暮れたものだった。

第二代主将故山口昭臣(四九回)。彼と井上房一郎さん(一五回)の間柄がサッカー部と井上さんを取り持つて、部に対して井上さんの援助が今まで続いているのである。

この年、現在正月に行われる選手権だと思つが、県大会で優勝し武蔵野サッカー場での関東大会へ出場した。当時は旅館がなく交通の便も悪く、岩淵先生の奥さんの関係から慈眼院の橋爪さんの紹介で、文京区の護国寺に米持参で一泊し試合に挑み、小田原商に0-2で敗れた。十二月下旬であつたが小春日和で汗びつしよりになり、皆パンツを脱ぎいわゆるノーパンで帰つて来たものである。

第三代主将国峯善次郎。関西修学旅行が復活し、マラソン大会が行われた年である。マラソンについては、この食糧難時代に逆行するものとして反対もあつたが、君力代橋を起点として行われた。生徒会の体育部理事をしていた私は、信越線の運行状況を群馬八幡駅に聞きに行き、そして無事終了出来た事を喜んだ。

岩淵先生は高崎女子高校へ転任されたが時たま指導を仰ぎ、先年復員された高橋基治さんにも指導していただいた。高橋さんは現在桐生市立商業高校勤務、県サッカー協会審判部長として活躍され現役の面倒を見て下さっている。春の合宿は、大八木町の岩淵先生の奥さんの実家のお寺で行い、中川小学校で練習した。もちろん、サッカーのサの字もない時代だったので、中川の人々は驚いたそう。部員の減少もこの頃から始まり、東京オリンピックまでこの傾向が続いたと聞く。部費は二万五〇〇〇円位だったと思う。内藤由己男校長(一六代)からラグビー部との合併話が強く持ち掛けられたが、「日本にも必ずサッカーの時代が来る」との練習相手だった在日韓国人

高崎玩具株式会社

代表取締役

石井 敬之助 (五〇回)

高崎市問屋町二一五―五
電話〇二七三(六二)二〇〇〇

川上整形外科医院

川上 哲男 (五〇回)

高崎市大八木町五七五
電話〇二七三(六二)一九六二

野沢産業株式会社

専務取締役

反町 定夫 (五〇回)

前橋市鶴光路町五一〇
電話〇二七二(六五)〇四三二

株式会社 国府不動産

代表取締役

片貝 劫也 (五一回)

群馬郡群馬町西国分二〇〇八
電話〇二七三(七三)〇〇二五

チームの方々の言葉を信じ、校長の話を蹴った。この件については、その後も何度かあったがその度に話を蹴ったと聞く。「もともと蹴るのが目的の集団なのだから」と皆で話した。

第四代主将植杉元一・小野恭司(五一回)。彼らの時代は珍しく同学年が大勢いて、面白い試合運びが出来た。井上さに「カッドン」を食べさせてもらったのは、この年代が一番数多かつたらしい。そろそろ物資も出回りスパイクも部員全部が履ける様になったが、まだまだボールは継ぎはぎ、スパイクのポイントは廃た。心残りなのは、山田泰司(五一回)が怪我をして長く治療に苦しみ、彼の御両親に迷惑をお掛けした事である。

第五代主将間庭康男(五二回)。第六代主将池内嵩(五三回)。第七代主将入沢正男(五四回)。第八代主将岸秀夫(五五回)。彼らの世代は、部員難に苦しんだがサッカーを理解し愛した。中でも間庭・池内は、現在群馬サッカー界の重鎮である。自らもプレーをし、そして後輩の指導を非常に良くする姿は頭が下がる。また、間庭と同期の黒岩達介のスキーにおいての名声は余りにも高い。この年代はそれぞれ個性があり皆成功している。爾来岸までその時々の高々カラーをよくカラフルに描き出し、OB会の集いに珍芸を披露してくれる。

外部コーチについては、山口主将時代は早稲田大学の平木さん、その後慶応義塾大学の両角・岩村さんとなり、以来慶大との関係が続いている。両角さんには



手作りのユニホームで
国体県予選 (S23.11.14)

九月十五日高崎経済大学で行れた第五回四十雀サッカー関東大会で二六年振りにお会いし、旧交を暖める事が出来た。

創設時代に遊びに来ていた佐野卓立さん(四九回)は、現在サッカー部顧問である。しかし渋沢・山口先輩と紋谷康喜先輩(四九回)・片山澄夫君(六〇回)が卒業後間もなく他界された事は非常に残念であり、御冥福を祈りたいと思う。また、私が現役だった頃に生れた岩瀬先生のお嬢さんの「まりこちゃん」も結婚され近くおめでたとの由、私の長男もOBとなった今、初めて高々サッカー三〇年の重みと厚さをつくづく感じ、同時にOB会員の二世たちが続々と高々を目指して頑張っているのを目の当りにし意を強くするものである。最後に、井上さんもあります御健勝でいられる事を心からお慶び申し上げます。(五〇回)

部員不足の悩み

小川 清治

サッカー部の歴史を通じて一番部員が少ない時代が、私の在籍中、昭和三十一年頃より五、六年の間ではなかつたかと

思います。九月に三年生が引退した後はインフォメーションを組む事も出来ず、終業ベルが鳴るとグラウンドならぬ下級生の教室に馳せ参じほん引き宜しく甘い言葉で勧誘して歩きましたが、これまで悪名?高かった部のためか部員は思う様に集まらず、ある日数少ない部員でボールを蹴っていると、運動部のさる顧問に「グラウンドも狭い事だし、いつそ廃部にしたら?」と言われ、大変情ない思いをした事は今もって忘れる事が出来ません。

もつとも、部員不足で悩んでいたのはサッカー部ばかりでなく、高々運動部全般に共通した事であつたろうと思われれます。試合ともなると、これまた大変で、入部一週間の素人がグラウンドに立ち、ある者は神経痛が起るとかで股引の上トレパンという珍妙なスタイルで審判より注意を受けた時さえありました。

股引で思い出すのは、当時の部長が生物の田中頭二先生(現高崎女子高校)で、こちらの方も股引のままグラウンドに出て我々と共に走り御指導下つた事も懐しい思い出です。夏の合宿には、現役の数を上回る先輩たちにもつちりしごかれ、体重が皆四、五kgも減り、鬼の先輩たちと陰口をたたき恨めしく思つた事もありました。

最近では、グラウンドも広く整備され野球部の硬球も気にせず伸び伸び練習している様子、また部員も二〇数名もいてレギュラーになるものもなかなか難しいなどと聞くにつけ、隔世の感が致します。(五六回)

群馬総業株式会社

取締役社長
古 関 武 (五二回)
高崎市大橋町二〇〇
電話〇二七三(二)三三(一)四六四

株式会社 高崎刃物店

代表取締役
中 川 保 (五二回)
高崎市鞆町五
電話〇二七三(二)二(四)六一五

坂東運輸株式会社

業務部長
深 沢 岩 吉 (五二回)
高崎市江木町三二七
電話〇二七三(二)三三(二)三三二

株式会社 田 胡 忠

代表取締役
田 胡 吉 明 (五四回)
高崎市高岡町三一一一
電話〇二七三(二)二七(三)三三三

サッカー部

青春の絆 1



「和」の尊さ

吉野 勉

「サッカーを度外視して私の高校時代を回顧する事は不可能である」といつても決して過言ではないであろう。毎日の練習・合宿・県外遠征など限らない思い出の中から、幾つかを選んで追想してみたい。

まず、二年の夏休に行われた国体県予選での優勝が挙げられる。この大会は、私たちが主力になっての最初の大会であった。新島学園を筆頭に、他のほとんどの高校はまだ三年生主体のチームで、新チームを編成したばかりの私たち二年生チームとは大会前から比較にならないが、一戦ごとにチームワークが堅固になり夢でしかなかった優勝という栄冠を獲得出来たのである。私を含めて何人かの部員は、決勝戦の翌日からキャンプに出掛ける予定で食料などをどっさり買い込んでいたという事実からも、この優勝がいかに思いがけないものであったかが

うかがえるであろう。旅行などの予定を練習に変更し、関東地区予選に臨み、そこでも勝利出来て本大会に出場したのである。この事も、今にして思えば、決して「まぐれ」ではなかったという気がする。私たちは、一年時からレギュラーチームの練習試合毎に試合を組んでもらい、紅白試合も含めるとかなり数多くの実戦を経験出来た。しかもそのほとんどの試合に勝利する事が出来たという事が、以後の試合における様々な局面での自信となり、「和」となり、好成績の原因となったという事は否めない。

もう一つ忘れられないのは、三年の春の県総体準決勝で関東大会出場権をかけての太田高校との一戦である。延長の末引分、抽選をする事になった。主審の投げ上げた十円玉が落ちるや否や私たちは駆け寄り、表裏をろくに確認せずに「やった！」と大喚声を上げた。すると、太高選手は表裏を確認する事も忘れうなだれてしまい、主審は十円玉ではなくその光景で判断し「高崎高校の勝ち」と宣し



第23回福井国体 (S43・10)

たのであった。実際は、この十円玉は、どちらの勝利を示していたのだろうか……。この一件などは、正に「和」の勝利といえるであろう。

私は、サッカー部を通じて良き先輩・仲間・後輩に巡り会い、現在も共に活動出来る事を幸せに思っている。(六九回)

勝つ事の喜びと苦しみ

高橋 義昭

試合終了のホイッスルが鳴った。結果は0-5、完敗だ。佐賀県総合運動場の試合の様子が目に浮ぶ。高校三年間、苦しい練習に耐え、得たものは全国高校総合体育大会出場という事だけだったのか。

僕たちが入学したのは昭和四十七年。三年生は中沢正明・中島庄司・中島秀好さん(七二回)しかいなかった。レギュラーの大半は二年生が占めていた。上級生の練習を横目にサーキットトレーニングやインサイドパスの練習。上級生の名前も覚えないうまま新チームへ。入学当時二〇人近くいた一年生も、一二、三人になっっていた。合宿を初めて経験するので不安とある恐怖が体を走り抜ける。魔の月曜日——慶応義塾大学の三上さんがコーチに来ていた——には、観山堂に偵察に行ったりして一喜一憂していた。二年の春には、森平文作先生(四六回)が富岡東高校に転出され、前橋女子高校から来られた石黒毅先生が顧問に選ばれた。そして、同期の国峯賢一・提箸宏・

長谷川医院 (内科一般)

長谷川 徹 (五四回)

高崎市石原町四一五
電話〇二七三(二二)四六八三

藤崎内科皮膚科医院

藤崎 裕 (五四回)

高崎市砂賀町一五
電話〇二七三(二二)二八一八

有限会社 司 土建

平野 展 司 (五五回)

代表取締役
高崎市新後閑町二九五―三
電話〇二七三(三三)三五四二

丸登産業株式会社

柳 沢 敏 (五五回)

代表取締役
高崎市和田町六
電話〇二七三(二六)五三一八

中島勲が入部して来た。僕たちの一年先輩のチームについては、野村敬・菊地裕さん（七三回）を始めとして一年の時からゲームに親しんでいる人が多かったのが強かったが、どうしても壁を越える事が出来なかった様だ。このチームの思い出は、県高校総体での前橋高校戦だろう。定期戦で二連敗していたので先輩たちはすごい意気込みだった。前半自殺点で二点取られ、後半二つのコーナーキックを決めて同点。延長に入ると両チーム怪我が相次いだ。菊地さんの決勝シュートで勝った。相手が前高でなくても二点を引つ繰り返した試合は素晴らしいが、僕たちに男の意地を教えてくれたので感謝している。

さて僕たちのチームだが、僕はこのチームが一番好きでもあり嫌いだもある。なぜなら僕は他の世代のチームの事は知らないから。時を追って戦歴を書いてみよう。

まず秋の市民大会で優勝。冬の選手権は西毛地区の代表になれず、新人戦でも二回戦で沼田高校と対戦し延長後半の終了一



全国高校総体（佐賀）

(S49・8・2)

分前にPKを決められ1-2で惜敗。春の県総体では、沼田高校（PK5-2）、榛名高校・桐生商業高校を破り、北関東大会出場を目前にして高崎商業高校に負け結局三位。全国総体県予選は、利根商業高校・桐生商業高校・沼田高校（PK5-3）・東京農業大学第二高校に勝って優勝した。石黒先生の記録によると、四七戦二九勝一敗七分、一一三得点・三一失点という結果だ。もう少しチームの特徴を上げてみると、三年になるまでは攻撃型、それ以後は守備型になっている。

この様に全国総体に出場出来る事になったが、七月三十日に出発、新幹線で新大阪まで行き、そこから寝台車で佐賀へと走る。言葉では簡単だが、約二時間揺られ通し、一日の長さをいやという程味わう。朝六時頃旅館に着き、一眠りして練習へ。その夜、佐賀名物『むつごろう』に化けたやつがいた。というのは、佐賀には用水路が数多くあり、そこから発生した蚊が皆の顔や手足を刺したので人間むつごろうが出来てしまった訳だ。翌朝、総体会場へ行く。九州で一番貧しい県といわれながらも、群馬県総合運動場は比喩物にならない。陸上競技場の芝生はまるでじゅうたん、素晴らしい一言。八月二日、一回戦の相手は広島工業高校。前半PKで一点取られ、後半終了間際に四点立て続けに取られて敗れる。相手のキャプテンは昨年のユースのキャプテンだからと自分を慰め、彼と写っている写真を見ては彼が全日本のユースにでもなればなどと今日思っているのだけ

れど……。OBの皆さんの御苦労のお陰ですぐ宿を追い出される事もなく毎晩蚊と戦いながら、八月五日南国を後にした。PK合戦で勝ち進んで行ったチームが最後の試合の先制点をPKで取られたのは皮肉だけれど、キャプテン清野哲雄・G K原田内二を中心とする「PKの高崎」は僕たちのチームの特徴をよく表現している言葉だと思う。

ここまでは結果だけを書いて来たが、サッカー部以外の人々に。僕たちのチームはよく喧嘩をした。チーム内で。もちろん試合中だろうが何だろうが、ボールの飛ばす方向で始まる事すらあった。だが、本当に自分のやりたい事をグラウンドの上で表現する時、ましてチームゲームの場合には、チームのために自分の腹の中のものをぶちまけてしまった方が良い時が多いのではないだろうか。その目的がスポーツであるからこそ、次の日にはすっかり忘れて仲良く出来るのだと思う。次に、何かに悩んでいる人に。高校時代に悩む事のある人は幸せだと思う。練習はスランプの時ほど嫌だと感じる。そんな時、観音山から練習を見ていた友人もいた。つまり、現状に妥協する様になつてしまふ事が一番恐ろしい事だと思ふ。思い切り悩み、勝つた時には喜び、負けた時には思い切り泣く事が大事なのではないだろうか。

ゴールには男のロマンがある。そしてそれを得る事が出来るのは常に勝者である。こんな文をどこかで読んだ記憶があるが、それと共に、勝つ事によって多くの事を学び自分を大きく出来るのも、汗

株式会社 笠井商店

代表取締役

笠井 秀 昭 (五六回)

高崎市上佐野町六九四
電話〇二七三(二)二五一一七

修道館石井道場

石井 清 一 (五七回)

群馬郡榛名町中室田一九四
電話〇二七三(七)四〇〇四七

が目にしみて夏の太陽を憎らしく思う事の出来るのも、スポーツをやった結果得られるものだと思う。僕は、高々時代にサッカーをする事に反対せず「勉強・勉強」といわなかった両親、そして、高校生活を支えてくれた多くの友人に感謝したい。

創立八〇周年を期し、校庭が整備されるという。以前の様に高跳に使うスポンジで水を吸い取るなんて事も思い出話になつてしまふかも知れない。奇麗になつたグラウンドも、高々生がラグビーの時に類擦りをするのを待つ事だろう。その期待を裏切らないためにも頑張つて欲しい。

カットの写真はいずれも

昭和四十九年度全国総体（佐賀） (七四回)

私と卓球



井上 浩二

コチコチになって何が何やら分らない内に負けてしまった初試合、うれしかった初勝利、力を合せて戦った団体戦、楽しかった高女との合同練習、卓球部での思い出は色々ありますが、今でも昨日の事のように思い出されるのは苦しく厳しかった合宿の事です。

先輩に対する言葉遣いの悪さ、集中力、気力の無さ、団結力の弱さ等々、精神面からまずお説教。「基本が出来ていない」と怒鳴られて、朝から夜までロードワーク、フットワーク、フォームの矯正など体力作り基礎作り。腕も足も石の様な硬さになり、便所に行ってもしゃがめず、合宿所の階段なども這って上り下りする程で、それまでいい加減な練習をして来た私は、何度も卓球部を止めてしまおうかと思ったりしたものでした。つらい一日の中、食事と夜のミーティングは、息抜きの出来る待ち遠しい時間でした。食事といっても今の翠樹会館の様な恵まれた設備も無く、部費も少なかったので、部員

一同米・味噌を持ち寄りカレーと福神漬だけなどというのも度々で、深沢昇先輩(五七回)・山口正敏先輩(五八回)の差入れや顧問の松原純一先生の奥さんの手料理など大変うれしく待ち遠しかったものです。夜のミーティングでは、松原先生の訓話や先輩たちの現役時代の苦勞や失敗談、社会に出てからの厳しさ等、昼間の練習では得られない有意義な話を聞かせていただきました。

恐怖の観音山石段登り、倉賀野杉並木までのマラソン、これ以上しごかれたら死んでしまうのではないかと思われた長い一週間の終えた時には、精神的にも肉体的にも一回りも二回りも大きくなったのを感じました。小さな身体で良く頑張ったキャプテン村田旭君の国体県予選での四位(三位まで国体に出場出来たので残念)、強打と守の井元誠・池上明夫組のダブルスは北関東大会に行き活躍しました。合宿で培われたチームワークで、団体戦では、西毛地区大会優勝、前高定期戦は一一連敗でストップ、秋季団体一般の部三位など、卓球部始まって以来の好成績を残せたのも、この時の先輩の厳しい指導と、苦しい練習に耐え抜いたという自信を元に、部員一同力を合せた結果だと思えます。それまでは恒例として三年になると受験勉強と称して部活動から遠のいていたものですが、やれば出来る、やり始めたならやり遂げるの合宿精神で、我々は三年の卓球シーズンの最後まで頑張りました。この時の気持を忘れずに、卒業してからも強い信念と情熱で先輩の指導に当っております。

しかし時代と共に、卓球技術の目覚ましい進歩、合理的練習、しごきに対する拒絶反応、受験戦争等、本人だけでなく周囲の環境も変り、合宿の意義も薄れて来た様に思われます。しかしこんな時代だからこそ、年一回の合宿の場で、厳しい訓練に培われた体力、精神力、苦しい練

昭和五十一年度 総会報告

副会長 友松 敬三

四月二十八日、高崎セントラルハイッ(高崎市常盤町)のレストラン・タカシマヤローズにおいて、昭和五十一年度翠樹体育会総会を挙行了しました。ローズの安藤維郎支配人がサツカー部OB(五七回)ですので、低予算で出来た事を感謝しております。当日は、中野敏宗校長先生を始め渡辺延一教頭先生・市川清先生(二五回)・清水貞保先生(三〇回)・山口正三郎氏(三〇回)をお迎えし、総勢一五〇名の盛大な総会となりました。

事業報告・会計報告に続いて役員改選に移り、国峯善次郎会長(五〇回)、会計担当の勝俣真副会長(五二回)と庶務担当の友松副会長の留任を決めました。副会長の一人である中川保氏(五二回)が野球部OB会長に専念するため、代って野球部前監督の本多饒氏(五七回)が事業担当副会長として登場致しました。次に編集部の位置付けが決定、年二回の機関誌発行が認め

習をやり抜いた後のすがすがしさ、同じ釜の飯を食って初めて知る男の友情、団結力、先輩を尊び後輩をいたわる心を持った人間を育て、いつまでも高々卓球部の発展繁栄を祈りたいと思えます。(六〇回・卓球部)

られました。最後に、前年度の計画の一つにありました会員名簿の作成について討議しましたが、三、四のOB会が提出遅延してましたので集まり次第作成を急ぐ事になりました。また、本会に対する要望が沢山ありましたが、その様な諸問題を今後一つ一つ解決して行くために役員を始め会員全員が努力する事を約し総会を終りました。総会の後は懇親会に移り、出席者の顔が徐々に赤み掛った頃会場が最高に盛り上がりつきました。先輩・後輩、集まっている人が皆スポーツを体験しているという事が心に広がって、こんなに酒がうまいとは。とにかく楽しい宴でした。宴半ばで応援部OBの東秀和氏(五一回)が、昔とつたきねづか、で怒鳴るエールがいかに哀愁に満ちていて、翠樹体育会が続いて行く事の大切さを改めて感じたとても意義ある総会でした。(六一回・バスケット部)

第三〇回

高々・前高定期戦



やったぜ！定期戦
一般奮起の大勝利！



明暗分けた綱引
(S51. 10. 6)

定期戦を終えて

生徒会長 加藤 仁朗

去年の大敗の雪辱を目指し我々高々生が一丸となって戦ったかいあって、高々VS前高定期戦は、一七点という大差をもって高々に栄光は輝いた。

前半善戦をしていた前高を追う高々の団結力は綱引で爆発した。E先生の研究の成果もあるが、競技者・応援者の呼吸の一致、これこそが勝因であろう。今回は部に頼るといふ従来の悪状態を脱皮し、和の勝利であった。

来年の定期戦には、前高は仕返しにやってくるであろう。しかし我々は、そんな前高生など返

第30回 高々・前高定期戦 得点表

	部	水泳	卓球	庭球	陸上	バレー	バスケット	ラグビー	サッカー	柔道	剣道	野球	体操	駅伝	綱引	小計	総計
		高々	6	6	0	0	6	6	6	0	6	0	0	6	/	/	
一般	一年	3	1	3	0	2	2	/	/	/	/	/	/	0	3	14	
	二年	0	0	3	0	2	1	/	/	/	/	/	/	1.5	3	10.5	
	三年	3	1	0	3	3	1	/	/	/	/	/	/	0	3	14	
前高	部	0	0	6	6	0	0	0	6	0	6	6	0	/	/	30	63.5
一般	一年	0	2	0	3	1	1	/	/	/	/	/	/	3	0	10	
	二年	3	3	0	3	1	2	/	/	/	/	/	/	1.5	0	13.5	
	三年	0	2	3	0	0	2	/	/	/	/	/	/	3	0	10	

(高々一五勝二一敗三分一中止)

討にしてやろうではないか。そして、高崎の街中をションボリと列を作って帰って行く様子を、高崎市民に見させようではないか。
来年もその次もその次も永久に勝とうではないか！

事業報告

昭和五十一年度

- 四・二一 「運動部への勧め」を一年生に配布
- 四・二八 定期総会
：タカシマヤローズ
全校マラソン大会上位
入賞者六名に副賞としてトロフィー贈呈
- 八・二 インターハイ出場者に饗別
庭球部 大野亀太郎
久米 修
- 九・一五 校庭の除草作業
- 九・一六 第一回編集会議
- 九・二〇 国体出場者に饗別
剣道教員の部
別府重竜先生
- 一〇・一五 第二回編集会議
水泳部 野村 照夫
- 一一・二〇 第三回編集会議
- 一二・二〇 第四回編集会議
- 一二・二九 役員会：御園すし



有限会社 群馬金網工業

代表取締役

田 島 宏 樹 (五七回)

高崎市江木町二二二三
電話〇二七三(二)二三八三

カネツ商事株式会社

取締役

堤 克 弘 (五七回)

東京都中央区日本橋蛸殻町一一一一
電話〇三(六六二)〇一一一

エビス薬局本店

薬剤師

塚 越 章 司 (五八回)

高崎市柳川町七六
電話〇二七三(二)三三二〇

株式会社 友松喜平商店

代表取締役

友 松 敬 二 (六一回)

高崎市相生町三〇
電話〇二七三(二)二二六〇

第二八回 高々全校マラソン大会



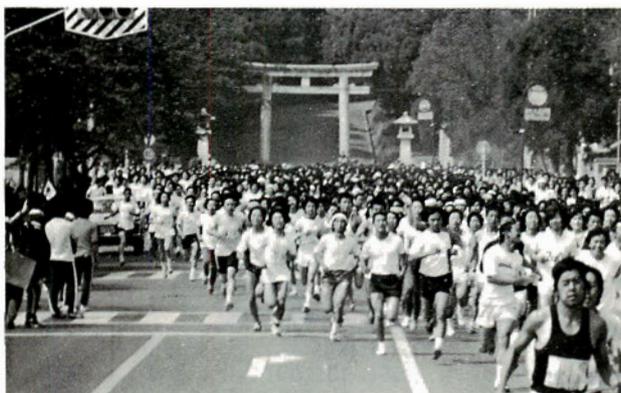
高々とマラソン

高々保健体育科

小林 馨

「マラソン」。正式には四二・一九五キロ走をマラソンと呼んでいるが、我々は長距離の代名詞としてマラソンという言葉を使用している。

このマラソンで高々の一年間の体育が始まる。五月中旬にマラソン大会というスタート！（S五一・五・一一）



のも少々時季外れで、一般の人も頭をかき上げるだろう。日頃指導している我々もこの時季外れのマラソン大会に考えさせられるものがある。日本においてのマラソンは、十一月中・下旬より翌年の三月中旬頃までを時季とし、まず低温下で行う事が常識とされている。日常余程鍛練された選手でさえ、この長い距離に対する肉体の消耗とレースによる精神的苦痛から、高温下でのレースは大変である。高々でこの時季にマラソン大会を行う事は、大学受験を目前に控えた三年生には夜遅くまでの勉強から非常に苦痛らしく、一部の生徒を消極的にしてしまう傾向もある。

「五月の開校記念日に、何か生徒全体が参加出来る行事をやるうではないか」という一生徒の提案から始まった高々全校マラソンも、二八回を迎え参加数一〇〇〇名を越える大マラソン大会に成長した。今では乗附の名物となり、住民、多くの卒業生が非常に大きな関心を寄せている。しかし、日頃勉強ばかりしていて体力の衰えている高々生、「運動なんかしなくてもよい。そんな時間があつたらもつと勉強しなくては大学へ行けないよ」という環境に育った人間が、五月の二〇度から二五度の高温の中をマラソン大会と称して一〇km走破するのだから、生徒も大変だが、これを実施する先生方

も楽ではない。

四月の新学期から体育の授業は長距離のみの内容で、より安全により速くをモットーに必死で指導する。幸い二・三年生は、三月二十日過ぎまで体育でラグビーをやり走り込んでいたので、走る事に抵抗はないが、新入生となると大変だ。中学三年の九月頃より本校受験のため一切の部活動をせず、ひたすら合格を願う机に向かつて七七八ヵ月、体力のなさ、顔色の悪さにはあきれるばかり、身体の大いのが目立つだけ……。

近年、乗物の普及、受験戦争、都市化等から若者の運動不足が目立ち、体格だけはすこく体力がさっぱりというアンバランスな成長から、年令に応じた運動量に対し肉体が耐えられないといった悲しい現象がある。まして高々生に、順位が良ければ良い点がつくという考えから、自分の体力・ペースを無視した無謀な戦いを自滅してしまう事が目立ち時々ビポービポーに乗せられる生徒もあるので、大会を運営する先生・生徒、校医の先生、ゴールに待機している真木実先生（四四回）らは、約六〇分落ち着いてなどいられないといった有様。しかし、こんな親心もどく吹く風、走り終りいふの木の下の裸になり参加賞の夏みかんを口一杯にはおぼせている生徒の姿を見た時、思わず心の中で無事であつた事に感謝し、また、若者の肉体の素晴らしさ、食事・睡眠に陰で気を配ってくれた保護者、交通整理の警察官、給水所を出してくれた国立コロニーの職員、地域の人々、補助員として活躍した生徒につく

づく頭が下がる思いがあふれる。

こんな様子のマラソン大会も、今年で二八回を迎える。昭和二十五年に始まったこのマラソン大会、君ヶ代橋をスタートし剣崎・藤塚を経て国道一七号を降り八千代橋を渡り学校に帰って来るコースを一六年間使用した。しかし、自動車の激増から国道を断念し乗附の地に強制され、吉井街道を折り返すコース、烏川の堤防を走るコース、と何度かコースを変えざるを得なかった。走る事がいかに大事かという事は、外国のマラソン大会、また日本の青梅マラソン、河口湖の高令者マラソンを見ても、人間は常に走つていなければ体力、また頭脳の活動もうまく行かない事が分ると思う。高々の全校マラソン大会も四分の一世紀を過ぎ、いつまでもこの大会を後輩に伝えようと、今では護国神社前をスタートし乗附→コロニー→観音様→石原→学校というコースを採っている。このコースは、



観音山頂付近（S五一・五・一一）

全校マラソン大会優勝者

回	年度	優勝者	学年	タイム	部 活 動	出 者 場 数	落 伍 者 数	備 考
1	24							実施しない
2	25	門倉 敦	3	39' 12"	陸 上	759	0	八幡折り返しコース
3	26	間庭 忠義	3	39' 12"	バスケット	766	0	
4	27	竹鼻 照雄	3	40' 46"	野 球	742	0	
5	28							中 止
6	29	高見沢啓二	3	39' 06"	バスケット	870	1	
7	30	斉藤 隆根	2	37' 25"	ラグビー	882	1	
8	31	渡木 昇	3	37' 12"	ラグビー	883	2	
9	32	竹鼻 次雄	2	37' 27"	陸 上	894	4	
10	33	竹鼻 次雄	3	タイムなし	陸 上	930	2	
11	34	大沢 進	定2	39' 06"		922	1	
12	35	大沢 進	定3	37' 15"		886	3	
13	36	大沢 進	定4	38' 40"		912	1	
14	37	清水 克哉	2	35' 48"	野 球	940	3	タイムは参考
15	38	砂賀 功	通信制	35' 40"		986	2	
16	39	山本 克己	1	39' 45"	陸 上	1,009	1	
17	40	山本 克己	2	37' 05"	陸 上	1,160	0	
18	41	山本 克己	3	34' 24"	陸 上	1,121	3	吉井線折り返しコース
19	42	宮崎 和典	3	34' 44"	ラグビー	1,084	0	
20	43	堀内 敏	3	34' 05"	バスケット	1,040	5	
21	44	笠原 勝	2	35' 42"	ラグビー	1,071	20	農二折り返し学校周辺コース
22	45	小坂橋 洋	2	36' 28"	陸 上	920	4	農二折り返し土手コース
23	46	星野 守俊	2	32' 35"	応 援	888	5	観音山コース
24	47	堀口 英利	1	31' 27"	陸 上	811	5	
25	48	木村 隆一	2	33' 01"	陸 上	892	6	
26	49	木村 勉	3	31' 34"	陸 上	918	4	
27	50	田端 輝彦	1	32' 48"		921	3	
28	51	滝野 裕明	3	33' 10"	山 岳	1,020	4	

登り下りが激しいが、高々ならではの素
晴らしいコースである。県下の高校では、
大部分コースの選定が難しくなりやむな
く中止のところが増えている。しかし、
ここに観音山がある限り、ここに高々が
ある限り、全校マラソン大会は、いつま
でもいつまでも高々生の思い出の散歩路
として残るだろう。

今年の閉会式には、翠巒体育会長國峰
善次郎氏より上位入賞者に翠巒体育会賞
が贈られました。有難うございました。

全校マラソン大会に
優勝して

三年 滝野 裕明

五月十一日、ついに長年の悲願で
あった優勝をなし遂げることが出来
た。中学一年のマラソン大会より数
えて六年である。今こうして書いて
いると、この六年間の試合の一つ一
つが懐かしく思い出されて来る。
途中何度も吐きそうになりふらつ
きながらも、最後まで走り通した中
学一年のマラソン。トップにびった
りくっつき精神的に参らせながらラ
ストスパートで失敗した陸上大会。
前半の首位争いで力尽き第三者に優
勝を奪われた中学三年のマラソン。
反対に前半抑え過ぎたため、ついに
挽回出来なかった駅伝……。この六
年間、失敗に次ぐ失敗であった。し
かし、この相次ぐ失敗を経て来たか
らこそ、今回の優勝がなされたもの
と信ずる。
ところで、先日、前高定期戦も近
いので、久しぶりに観音山を走って
みた。最初は調子よかったものの、
丸山団地の急坂に差し掛ると、呼吸
は乱れるお腹は痛むわで散々であっ
た。腹というが、いつも痛むのは胸
である。呼吸する度に肋骨が痛むの
だ。山を下る時には早くも痙攣が起
き掛っていた。改めて思い知らされ
た。やはりマラソンは継続が第一で
あると。

昭和51年度 高々運動部活躍状況

(昭和51・9・30)

大会 部	50年		51年	
	県総体	県総体	インターハイ 県予選	その他
陸上部	5位	6位	3名5種目通過	学校対抗1部 8位
バスケット部	2位	4位	3位	強化大会 1位 1年生大会 1位
バレー部	1位	3位	5位	
庭球部	5位	9位	大野・久米組 5位	
卓球部		2回戦		
ラグビー部	1位	3位	冬季	
サッカー部	3位	2回戦	2回戦	
体操部	7位	7位	7位	
山岳部	10位	10位		
柔道部	9位	2回戦	1回戦	
相撲	4位	1位	3位	インハイ個人予選 黒崎 3位
剣道部	5位	6位		学校対抗 1位
水泳部	1位	1位		

野 球 部

- 秋季大会
(西毛地区予選)
高々1-0 農大二高 1回戦
高々4-2 高崎商 2回戦
(県大会)
高々12-0 勢多農 1回戦
高々2-3 前橋高 準々決勝
- 夏季大会
高々9-2 太田高 2回戦
高々0-4 農大二高 3回戦
- 秋季大会
高々2-7 富岡高
西毛地区予選 1回戦

国 体

- 水泳部
野村照夫 200m バタフライ予選
12位(落)
400m 個人メドレー
5位

関 東 大 会

○陸上部

- 清水 俊夫 砲丸投予選 (落)
円盤投予選 (落)
槍 投予選 (落)
波多野重雄 100m 予選 (落)
渡丸 覚 110m ハードル予選 (落)

○バレー部

- 高々2-0 茨城・緑岡高 1回戦
高々0-2 東京・東洋高 2回戦

○庭球部

- 大野亀太郎組 3回戦
久米 修

○ラグビー部

- 高々19-8 千葉工

○柔道部一相撲

- (団体) 高々 16位
(個人) 黒崎 高行 ベスト 8
大井 直人 ベスト 8

○水泳部

- (団体)
高々 400m リレー予選 11位(落)
高々 800m リレー 8位<県高校新>
高々 400m メドレーリレー予選 11位(落)
- (個人)
野村 照夫 200m 個人メドレー 5位
400m 個人メドレー 2位
脇 孝二 400m 個人メドレー予選 (落)
須藤 聡 100m 自由形予選 (落)
小俣 等 1500m 自由形予選 (落)

インターハイ

○庭球部

- 大野亀太郎組 5回戦(ベスト32)
久米 修

○水泳部

- 野村 照夫 200m 個人メドレー 8位
400m 個人メドレー予選 10位(落)

○柔道部一相撲

- 黒崎 高行 1回戦

先輩、頑張ってます

現役の活躍



インターハイ報告

— 相 撲 —

二年 黒崎 高行

私は、七月三十一日から八月四日までインターハイに参加しました。誰でも運動部に入っている者にとっては、インターハイ出場というのは高校生活における最大の夢だと思います。私はそれに二年で参加出来たのですから、大変ラッキーだったと思っています。

相撲は、福井市立体育館において八月二日から行われました。開会式の後、団体戦に続き個人戦でした。試合方法は、予選リーグで三回戦い、32選手が決勝トーナメントに出場して優勝を争います。残念ながら私は、予選リーグで全敗してしまいました。

私は今度の大会で、全国のレベルがいかに高いかということを知りました。ま

インターハイに出場して

庭 球 部

三年 大野 亀太郎

私は、幸運にしてインターハイに出場する事が出来た。高校に入って以来何とかしてインターハイに出場したいと願っていたので、その喜びは例え様もなかった。

私は軟式庭球の個人戦に、パートナーの久米修君(三年)と出場した。開催地は松本市で、八月二日から行われた。一回戦は岡山南高校とで、全体の試合開始から二試合目だったので八時三〇分頃から始まった。第一試合をコートの外から見ていて、自分たちのいつもの力を発揮すれば勝れると思った。試合は自分たちのペースが作れたので、4-1で勝

てた。その日は一〇時頃から雨で、予定されていた二回戦までを消化出来ずに延期。続く二日目、二回戦、相手は沖繩・那覇工業高校。この試合は、相手の自滅という感じで4-0で勝つ事が出来た。その日も雨で、一試合のみだった。二日間とも会場のテニスコートの横にある野球場のベンチで雨宿り、昼寝などしてのんびりしたムードだった。

一日延期され八月四日に残りの試合が行われた。三回戦は埼玉・狭山高校。前衛が調子を崩してしまっただけで、どう

にか4-1で勝つ事が出来た。四回戦は奈良・高田商業高校。私たちもこれまでと思つたが、私のロブが相手の前衛をうまくかわし4-1で勝つた。その試合後すぐに五回戦があり、青森・八戸工業大

学付属第一高校とだった。サーブスキップで3-3でファイナルゲームとなり、マッチポイントも三回程とつたが結局押し切れず3-4で負けた。この試合は敗れはしたが、今までの中で最高のゲームだった様に思う。

インターハイを終って、全国のどこでも実力はほとんど変わらないので、その日のコンディションを最高に持って行く事が出来、精神力の強い者が勝つ事を実感した。それと、あの五回戦でもう一押ししていれば勝てたはずだと思うと、日頃から寸暇も惜しんで庭球に打ち込んでいたらなああと後悔してやまない。最後に、私たちが全国ベスト32になれたのは、無欲で試合に臨んだのが大きく作用した事を述べて報告を終る。

第三一回若楠国体に出場して

水 泳 部

三年 野村 照夫

九月に佐賀県で開催された第三一回若楠国体(夏季)に、群馬県選手二名と共に出場しました。私は、高々に入ってから連続三回出場する事が出来ました。

これは、水泳部の県総体でV2を達成した総合力の支えがあったからだと思います。佐賀では、「さわやかに、すこやかに、おおらかに」の国体のキャッチフレー

ーズに相応しい歓迎を受けました。

当日は、少し肌寒い位のあいにくの曇天でした。私は、少年男子A(高校二・三年の部)で個人二種目・リレー二種目に出場しました。個人種目、二〇〇Mバタフライは二位で決勝進出はなりませんでしたが、四〇〇M個人メドレーでは決勝に残り五位に入賞する事が出来ました。高校生活最後のレースだったので、スタートから意欲的に飛ばし後半苦しかったのですが五分七秒七三とベストには〇秒五及びまよりましたが好記録でした。八月の長野のインターハイでは、二〇〇M個人メドレー八位、四〇〇M個人メドレーは一〇位と振るわなかったのですが、今回は悔いの残らない会心のレースが出来ました。リレーは、全国レベルに今一步といった感じでした。

本県選手の主な成績は、決勝進出一名(七位)、補欠二名と一チームでした。今年の高々からの国体出場は剣道の別府重童先生と私の二名でしたが、来年は大勢で出場出来るように後輩の一層の精進を期待します。



母校のプールで

先輩、今年も頑張ります

現役の抱負 その1



新しい心意気で

水泳部



二年 島崎 秀明

優勝。この言葉のために、今までどれだけの先輩方がどんなにか努力したことでしょう。その努力が実り、ついに一年・昨年と二年連続優勝をなし遂げました。

この記録は、近年まれな大記録です。そして今年「三連勝を！」と、先輩方も考えておられるでしょう。しかし私たちにあって、三連勝という言葉は重荷でしかありません。「王座に就くのは大変であるが、それにも増して王座を守るのはもっと大変である」とよくいわれます。こんなことを書く力がなければならぬと思われそうですが、決してそんなことはあ

りません。現時点で実力は、昨年を上回り県下に敵なしといわれています。しかし、心の重圧は、実力を半分にしてしまふことが間々あります。そこで今年、「優勝する高々水泳部」ではなく、「優勝をねらう高々水泳部」といった新しい心意気で、優勝、すなわちV3をもぎ取ろうと、部員一同決意を固めています。

柔道・相撲共に

柔道部



二年 藤巻 秀文

柔道においては第一目標は、関東大会出場という事です。これまでに九回出場

しているのですが、今年は一〇回出場を達成したいと思っています。そしてそのためにも、十一月に行われる新人戦で何としてもベスト8には食い込みたいと思います。練習に励んでいます。このところやや柔道が不振だといわれていますので、今年は重点を置いて頑張っていくつもりです。相撲では、昨年に引き続き、高知の全国大会に出場する事を一つの目標としています。そしてもう一つは、関東大会に出場し決勝トーナメントに残る事です。相撲における昨年度の成績はかなり良いものだったので、今年もその伝統を受け継ぐよう努力して行きます。

ところで今年はいつになく一年生の入部が多く、部員数は県下でも最も多くなっています。一年生の中かなりの力を持っている選手がいるので、彼らを鍛え

ながら柔道部を盛り立てて行きたいと思っています。最後に、先輩方に教えに来て下さるようお願いいたします。どうぞ、道場に顔を出して下さい。

「精神野球」で勝利を

野球部



二年 白石 尊信

勝つこと。すべては勝つことです。己に勝ち、他人に勝ち、そして試合に勝つのです。勝たなければ何の意味もありません。高校野球は精神野球といわれます。これはもともと本話です。そして少なからず精神野球とは、勝利に一丸となつて向かうことを意味しているのです。

高々野球部が最近の大会においてどうしても良い成績が収められないのは、甲子園に出場したチームは持つが、我々に「何か」が欠けているためです。これは野球部一同身をもって分っていることなのです。過去、高々野球部は、一度も甲子園の土を踏んでいません。これはやはり、この精神面によるところが大きいように思えます。ここが問題なのです。そして、この漠然とした精神的な「何か」を克服するか否かに、我々高々野球部が甲子園に出場出来るか否かがかかっているのです。

すべてを克服したその日、我々は、甲子園球場のセンターポールに校旗が翻り、「翠巒」の響く時を持つことでしょう。

一味違うバスケット

バスケット部



二年 橋爪 恒二郎

今年のチームは、昨年と比べて平均身長で7、8cm低い。県内でも相当小柄な

部類に属する。それだけに我々には基本プレーの体得とディフェンスの強化は不可欠であり、それと同時に素早く状況判断を下す眼と頑強な精神力も養わなければならない。

夏休に行われた強化大会・一年生大会は共に高々が優勝し、幸先良いスタートを切った。ゴールはインターハイ出場であるが、その間の新人戦・県総体も共に勝ち取り、全大会制覇を目標として練習に励んでいる。

当面の課題として、速攻と、2対2・3対3を中心としたリズムカルなオフフェンス、マンツーマンを主体としてゾーンやプレスディフェンス、コンビネーションプレーの完成、ミドルシュート、リバウンドの強化など。

部員は一七名、各人個性豊かであり皆打ち解けているので、お互い語り合い研き合つて、目標達成はもちろん、その他高校生活においての部活動というものの意義などを発見出来たらと思っている。

我々はまだまだ未完成なチームではあるが、良き指導者の下に、積極的な練習態度で、先輩たちが築いた高々バスケット部の栄光の歴史に新たなページを加えんとしている。

試合のための練習を

ラグビー部

二年 横山 和幸



毎日貴重な時間を割いて練習をするからには、目的はやはり試合に勝つことであり、最終目標は全国大会出場である。それには、練習のための練習でなく、試合のための練習をすること、これが何よりも大切だと思う。

他校と比べれば、練習時間は確かに短い。だからこそ中身の濃い練習が必要だと思ふ。ランニングパス一つにしても、相手にぶち当たるつもりでボールをもらいパスをする。そして、トライをするつもりでゴールラインを駆け抜ける。ただ百メートルをボールを回して走るだけでは、練習のための練習になってしまう。ラインアウト・ペナルティなどの練習でも、常に相手の動きを頭に描き一つ一つ正確にやらなければならぬ。サインプレーにしても、練習で何回となく正確に出来てこそ初めて試合に成功するのだ。数々の栄光を勝ち得て来たこの伝統ある高々ラグビー部。練習では、先生が厳しく指導して下さるし、大勢の先輩方もよく来て下さる。また坂田英明先生(英語科)には勉強の方まで面倒みてもらっている。この素晴らしい先生・先輩方の期待に十分答え得るように、前に記したような気持ちで練習に励み、部員全部が一体となり全国大会を目指したい。

危ぶまれる山岳活動

山岳部

二年 丸茂 吉茂



八月三日、本白根山で起きた高崎女子高校の惨事が、県教委・高体連、また高校へ与えた刺激は思いの外大きく、そのため、例年秋の連休に行われて来た松木沢における岩登りの基礎技術習得の山行は、学校側の意向により中止が決定されている。翠巒の下に先輩たちによって継

受されて来た活動の一つが、遺憾にも今年には承継不可能となってしまった。このように、山岳部活動に対する規制は、高々山岳部にも大きな影響を及ぼし始めた。これは、個人山行にも大きな波紋となって広がりがつつある。「秋のドンタク」。待ちに待った沢登りのシーズン当来である。澄み渡った紺青の空、紅に燃える大地、谷を走る寒水は冬の訪れの間近いことを告げる中、源流を求めて溯る。しかし、この沢登りも「一切禁止!」とも成りかねない状況にある。元来、高校登山に沢・岩は無理だと言われている。しかし、私たちは私たちにその準備をして来た。そして谷川岳の沢の中にも、高校生の登山技術で十分な沢があるということを理解してもらいたい。

先輩から受け継いだ山岳活動を一層活発にして行くことである。

一日一日を大切に

卓球部

二年 金井 広一



現在、部員はたった九名と運動部の中では比較的少ない。しかし、この少ない部員で能率よく一生懸命やっている毎日である。

ところで、卓球というものは、バレーやラグビーなどの集団でやるスポーツではないが、やはりチームワークが一番大切である。その点では、少人数のせいもあるが、よくまとまっている方だろう。そして、部員一人一人それぞれよいパターンを持っており、良い試合が出来るのだが、他校の強豪と比べるとまだまだである。それは、一つは、足腰が弱いこと、これを克服するために、冬場は走りこむことにしており、腕立て伏せや腹筋運動などの基礎体力造りも欠かさずやっている。もう一つは、他校と比べると練習量が少ないことで、これは進学校である高々にとってはどうしようもないし、より能率よくやるしかないのである。やはりこれからの第一の目標は、総体にあると思う。だから一日一日を大切に、濃い練習内容で着々と力を付けて行こうと思う。そして、何とか総体で上位に食い込めるように頑張って行くつもりである。

押忍の精神で

高々の統制を

応援部

二年 小坂橋 正人



最近、応援部員が考えることは、高々生が個々の自由を求め過ぎるためか、伝統ある堅い団結力が薄れているのではないかと不安である。少数ではあるが団結を主旨とする応援部員にとって、大いに憤慨すべき点である。

皆さんの中には、勝利という目的を持たない応援部を軽視する人もあると思うが、我々は日夜強固な精神——押忍の精神に代表される——によって母校運動部の勝利と団結を導くべく練習に励んでいる。今こそ我々は、翠巒祭で見せたあの気迫を取りもどさなくてはならない。生徒諸君も、この応援部の期待に答えてもらいたい。そして、生徒・応援部が一丸となり、勝利のため多彩な応援を操り広げる。これこそ、真の団結力を看板とする高々の本性ではないだろうか。我々は、押忍の精神で向事も頑張るのだ。また部員自身、冬の間体力をつけ、忍耐力をつけ、春合宿には諸先輩の厚い指導を受け、今にない古い高々精神も心に持ち、リーダー・バック等の型の充実を図り、これからの高々の発展・勝利に大きく貢献したいと思うし、生徒諸君の期待にそいたいと考える。押忍 未来の高々に栄えあれ!

先輩、今年も頑張ります

現役の抱負 その2



「ねばり」ある剣道を

剣道部

二年 小池 政一



今年の目標も新人戦・関東・県総体・インターハイで勝利を取めることである

が、そのためには、他校よりも短い練習時間をフルに活用しより一層密度の高い練習にし、一日一日・一打一打を大切に

して行く必要があると思う。

今までの高々剣道部は、もう少しのところで優勝を逃していた。その原因はと考えると、技では他校に勝っていると思われのだが、やはり「ねばり」という点に欠けることではないか。今年はこの「ねばり」のある、しぶとい剣道に重点をおいて努力して行きたい。

先日行われた我々にとって初陣である

選手権には、運よく優勝することが出来た。しかし、一回位勝てたからといって油断していたのでは、次は最下位に突き落されてしまう。それが勝負の世界というものである。これからは各校からマークされ追われる身となり、前途は多難であるに違いない。しかし、勝つて兜の緒を締めて、部員一同、一丸となり勝利に向かって突き進んで行きたいと思う。

新人戦に向かって

バレー部

二年 金子 大司



昨年と比べ、部員も増え、人材的にもかなり恵まれていますが、ここで、この機会を逃さぬようにと、一日一日を精一杯やっています。

新チームになってから、インターハイ予選・国体予選がありました。共に完敗しました。また、夏休みの練習試合では二三セット中、一セットも取れなかったという事もあり、勝つ事の難しさを改めて感じました。

これからの目標は、バレーボール大会の花ともいえる、春の選抜大会の出場をかけた新人戦に勝つ事です。そのためには、サーブ、サーブレシーブ、レシーブ、スピードのある変化に富んだ攻撃を自分たちで考えながら練習しなければなりません。その点は、自主性のあるやる気がある者ばかりなので、とても気合の入った練習が出来ています。

本校二年目の菊地俊二先生(五二回・保健体育科)も本腰で私たちの練習を見て下さるので、ここで一旗揚げて全国に高々の名を広めたいと思っています。これから色々と大会がありますが、その時は応援をよろしくお願いします。

インターハイ入賞を目指して

陸上部

二年 波多野 重雄



昨年、陸上部は、小林馨先生(保健体育科)が高々に就任されて以来一〇余年続いた関東大会出場を三人五種目で果したものの、そこでついに力尽き、これも一昨年まで六年程続いたインターハイ出場はなりませんでした。

しかし県クラスの大会では、春の総体に次いで重要な秋の学校対抗で、三年一人、二年二人、一年八人という極少数人数で苦戦に次ぐ苦戦を強いられながら、何とか一部で八位になり、諸先輩方の築いて下さった伝統と一部校の資格を守り抜きました。しかも、短距離・ハードル・リレーなどの種目においては一・二年生の中にも昨年の関東大会の入賞記録を上回る好記録も出た事です。今年も関東大会が群馬で行われますので、また数名を全国大会に送りあげようば入賞も……と思っている次第です。

したOB会も刺激になって、きつとなし遂げる者もいるでしょう。その日のために、今日も陸上部は黙々と練習を続けるのです。

一戦一戦を大事に

サッカー部

二年 坂田 一宏



六月のインターハイ予選で三年生はほとんど引退し、新チーム結成という形になりました。これで優勝経験のないチームになった訳ですが、部員一同新たな気持ちで練習に励んでいます。何といっても目標は優勝で、そのためにも我々が内容ある練習をすると共に、先生・OB方の良き御指導をお願いします。

現在、正月に行われる全国選手権大会の西毛地区一次リーグ選を一週間後に控えています。高々では、例年、選手権よりもインターハイに目標が置かれ勝ちですが、サッカーの大会では最も大きな大会であり、新チーム結成後初めての大会でもありますので、昨年のベスト8を是非共上回りたいと思います。そして願わくは、優勝という夢を持っています。この夢を夢でなくならせるためには、まず第一に、一次・二次リーグを勝ち抜かなければ話になりません。

数日前まで試験のため練習が休みで、練習は十分だとはいえませんが、とにかくこの一週間、死物狂いで頑張り、一戦一戦を大事にして行きたいと思っています。

チームワークで

体操部

二年 湯浅 和之



僕たちのすぐ目の前に控えている前橋高校との定期戦。これには絶対に勝たなければならぬというのが当面の目標であるが、終局的な目標は来春の県総体で上位に食い込む事である。

今年の国体予選では団体七位という成績だが、僕たちは段々実力を増して来ていよう。僕たちに共通している事は、鞍馬・平行棒がやや苦手だということだ。これを克服しない事には上位には入れないが、他の種目では他校にあまり引けを取っていないよう。床運動だけというところ、かなり上位の方だと思う。

体操部は少々人数が少ないが、それだけにチームはまとまりやすい。チームの

庭球部の近況

庭球部監督

丸山 博

例年は校内で行っている強化合宿を、八月十六日から二十日まで中軽井沢・塩沢湖のほとりで行った。一・二年生三一名参加という多人数のため、吉野コートや市営コートでは出来なかつたからである。塩沢といえばテニス民宿村で名高く見渡す限りテニスコートばかり、朝五時から「ファイト・ファイト」というランニングの掛声が響くテニス環境抜群の地

和、これだけは僕たちが他校に誇れる事だと思ふ。チーム全員が一致団結し、これからも頑張りたい。

足腰を鍛えて

庭球部

二年 吉本 泰



思うに、高々のテニスは、「格好よく腕いテニス」ではないだろうか。と言うのは、一試合に数本は目を見張る様なポイントを決めたりするが、いざ競合になると弱いからである。この点を克服するには、「粘りあるテニス」を身に付ける事、そのためには毎日の練習を充実させて行く事が必要だと思ふ。我が庭球部は、他に類を見ない程の多人数を抱えているのに、使用出来るコート数が限られている故、どうしても各々の練習量が充

である。それまで市営コートでも一〜二面を使っていた練習とは違い、三〜四面を使って一斉にボールを打つのは実に明快、運動量も多く、全員が一段と良いボールを打つようになった。遠路にもかかわらず、勝俣真氏(五二回)・高橋登氏(六六回)・山崎和広氏(六八回)を始め一〇数名の先輩が参加され指導に当たれた事に深く感謝している。

合宿も終り、その後の大会の結果を見ると余り芳しくない。一年生大会でベスト8が一組、新人大会は団体ベスト16、個人もベスト16止り。十一月四日から冬

分に取れない。この事は他校に比べ明らかに不利ではあるが、それに甘えて自分の怠惰を押し隠す様な態度をとらず、内味の濃い練習内容とチームワークでカバーして行きたい。幸い、今年の二年生と一年生の間には、時々破目はずす事もあるが、非常に和んだ雰囲気を感じられる。これは、部を運営して行く上の大きなメリットだと言える。

技術的な面に目をやると、我々はフトワークの悪さを指摘されて来た。華やかなプレーばかり追い掛けて、基礎体力作りをおろそかにした報いではないか。今年、例年以上に、出来るだけランニングの時間を取り、足腰を鍛えて行きたい。

他にも沢山の課題が残っているが、以上が我々の反省と今後の抱負である。最後に、卒業する時、「三年間クラブをやって来てよかった」と全員が口をそろえて言える様な部にして行きたいと思う。

季練習に入り、毎日3kmのランニングと階段登り等に汗を流している。この冬に流す汗の量が来春の勝利に結び付くのだと全員頑張っている。諸先輩の期待に応えるべく。

なお、須藤雅志氏(七二回)がこの七月に病のため他界された。謹んで御冥福を祈る。

また、四月に前橋南高校に転出された鴻巣敏之先生に代り、私が監督に就任しました。御指導・御援助をよろしくお願ひ致します。(六八回・庭球部 保健体育科)

岩田薬局

薬剤師

岩田 和弘(六二回)

高崎市大橋町一―二
電話〇二七三(二二)五二五三

有限会社 田村屋

代表取締役

遠藤 潤(六二回)

高崎市柳川町一
電話〇二七三(二二)二七三三

オリエンタル

美容室

森田 忠吉(六二回)

高崎市通町七五
電話〇二七三(二二)七七二二

藤井繊維株式会社

営業部長

藤井 行雄(六六回)

高崎市問屋町一―二
電話〇二七三(六二)一六九〇

翠 巒 体 育 会 役 員 名 簿

山 岳	剣 道	柔 道	水 泳	サ ッ カ ー	ラ グ ビ ー	バ レ ー	バ ス ケ ッ ト	庭 球	卓 球	陸 上	理 事	副 会 長	会 長																					
酒井 征哉	清水 正爾	柳沢 敏	笠井 孝親	白井 雄一	石井 清一	桜井 弘	湯浅 潔	小此木 勝	田胡 吉明	佐藤 義夫	岸 秀夫	國峰 善次郎	真木 紘道	山口 英雄	住谷 克彦	織茂 広昭	片野 恒	友松 敬三	岩田 武雄	反町 定夫	塚越 章司	峰 哲彦	勝俣 真	山口 正敏	深沢 昇	竹内 成幸	大須賀 正臣	大田部 保	友松 敬三	本多 鏡	勝俣 真	國峰 善次郎		
六二	五五	五五	五五	六三	五七	五六	五六	五四	五八	五五	五〇	六〇	五三	四九	五〇	四九	六一	五〇	五三	五〇	五八	五二	五二	五七	五七	五九	五七	五二	五〇	五二	五二	五〇	五〇	五〇
田畑 穰	丸山 敏夫	林 善二	稲村 善二	高橋 信男	平石 健三	大川 純三郎	別府 重竜	江原 隆起	大井 恵夫	丸山 博	志村 甲子郎	増村 博	石黒 毅	佐野 卓	岡田 由重	中原 射鹿止	坂田 英明	菊地 俊二	岸 清	猪俣 元昭	掛川 尚幸	植川 育三	川嶋 尚武	木村 敏夫	林 敏夫	丸山 博	清水 竜雄	木村 正芳	塩浦 徳三郎	菊地 俊二	小林 馨	学校側顧問 校長 中野 敏宗 教頭 渡辺 延一 運動部長 川嶋 尚武		

編 集 後 記



「運動部への勧め」の文案を作成したのが縁となり、「翠巒体育」発刊に際し当初は会長の所属OB会で編集を担当せよとの事でサッカー部を代表してお引受けしていたところ、この度正式に編集部が設けられてその担当者に推されます。責任の重大さを感じています。しかし今年には不思議に身辺多忙を極め、第三号をお手許にお届けするのが大幅に遅れてしまい申し訳なく思っております。

一二頁でスタートした「翠巒体育」も関係の皆様のご協力により第三号は二二

頁と発展し、やがては、経費・編集の面からは大変だろうけれども、週刊誌の厚さになるのではないかと編集部では喜んでおります。今後の課題の一つに、「OB会の活動」欄の充実化があると思えます。また、例えば短歌・俳句形式でも結構だと考えますが、気楽に御寄稿下さる様お願い致します。(田中彰)

体 操	野 球	応 援	ス キ ー	ス ケ ー ト	事 務 局	編 集 部	副 部 長	編 集 部 長					
森田 忠義	小森 谷久	中島 正	中川 保	本多 鏡	下田 茂夫	安松 保彦	川嶋 尚武	菊地 俊二	中原 射鹿止	丸山 博	田中 彰	安田 謙	佐藤 義夫
五九	四七	四八	五二	五七	五〇	六〇	四九	五二	五五	六八	五〇	五一	五八
滝沢 武司	丸山 博	岡田 由重	高橋 正親	飯野 邦彦	小林 馨	鈴木 武夫	岡村 昇治	田畑 穰	高松 昭栄	藤井 弘道	学校側顧問		

翠巒体育 第三号
昭和五十一年十二月二十九日発行
翠巒体育会事務局
高崎市八千代町二一四一(二三七〇)
群馬県立高崎高等学校内
電話 〇二七三(二四)〇〇七四(代)
印刷 荒瀬印刷株式会社